
天使の羽～アモー～

紫華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の羽（アモー）

【Nコード】

N1590A

【作者名】

紫華

【あらすじ】

天使になるため、天使養成学校で日々学ぶ半人前の天使たち。主人公の片葉もそこに通う一人の半人前天使。劣等性の片葉に降りかかる災難とは・・・？

灰色〈gray〉

悪魔は昔・・・天使だった。

~~~~~  
~~~~~

キンコンカンコン・・・

先生「あ・・・片葉は後で天使指導室にくるように！」

片葉「・・・はい。」

ここは天使の養成学校。

生まれたての天使は何も知らない。

だからここ、養成学校で先生から基礎を学ぶ。

人と人の運命の赤い糸を結ぶキューピットでさえ、そう簡単になれるものではないのだ。

（はああ・・・また先生に呼び出されちゃた。）

片葉はお世辞にも優秀とは言えず、何度も失敗をして先生に呼び出された事のあるいわゆる劣等生だった。

庚「片葉ってば、まあテストの点悪かったの!？」

そう片葉に笑いながら話掛けるのは、クラス1の優等生であり、片葉の無二の親友でもある庚だ。かのえ

片葉「ふえくん。笑い事じゃないよお。どうしよう・・・。」

庚「ま、とりあえず指導室に行って来な!遅いとまた怒られるよ!」

庚にそう言われて、重い足を動かして天使指導室へ向かった。

コンコン。ノックを2回して返事を待つ。

先生「入れ。」

片葉「失礼します・・・。」

(はぁ・・・今日は何言われるんだろ。)

先生の顔を見てみると、いつもよりも表情が固い。

(私、そんなにテスト悪かったのかな・・・頑張ったのに。)

先生はずっと片葉の顔を見て黙り込んでいる。

片葉「先生？」

先生は大きくため息をしてから片葉に告げる。

先生「どうやらお前は天使になれる見込みがないようだ。この前の追試は大天使様から言われたものでな。あれに落ちたら天使昇格取り消しなんだ・・・。落ちたのは片葉、お前1人だ。」

天使にもテストはある。紙に書かれた問題を解くのではなく、課題にそって人を助けたりするのだ。

上のランクの天使を目指すごとに課題は難しくなる。

しかし、養成学校に通っている片葉たちはまだ半人前。

大天使様からの言いつけで1人前の天使になるための課題が抜き打ちで行われる。

片葉は自分1人が落ちたという言葉に衝撃を受けた。

片葉「そんな・・・じゃあ私はどうなるんですか!？」

先生は黙って同情するように片葉を見る。

養成学校で天使昇格テストに落ちたらどうなるか。

大人の天使たちは誰もが知っている暗黙のルール・・・。

しかし、片葉はまだそのことを知らない。

先生がやっと重い口を開いた。

先生「・・・お前はこれから4階に行きなさい。」

片葉はその言葉を聞いて驚いた。

4階は『禁止区域』。

生徒天使は行くことを許されていない階だ。

片葉「先生っ! その階は・・・」

片葉の言葉を遮るように先生が怒鳴った。

先生「いいから行きなさい! そこに居る方が全て教えてくれるから。」

先生の辛そうな口ぶりで、片葉はそれ以上何も言えなかった。
これから自分に何が起こるのか検討もつかなかった。

教室に置いていた自分のカバンを持って、4階へ向かった。

（4階かぁ・・・何をしてる階なんだろう。特別指導とか？それともスパルタ教育かな？そんなんじゃないかな・・・1ヶ月みっちり修行とか？）

片葉は何が起きても悲しまないように辛そうなことをいろいろ考えた。

片葉は4階についた。

しかし4階だけは他の階と違い、冷たい空気を感じた。

（4階っていつでも広いよなあ。どこに行けばいい訳！？）

?? 「いらっしやい・・・。」

後ろから凍りそうな気配と声がした。

片葉「誰っ!？」

片葉は思わず身構えた。

?? 「私の名前はレフィカル。あなたは片葉さんね？こちらにいらっしやい。」

レフィカルと名乗る女の人は、グレーの髪と瞳で、グレーの服を着

ている。

天使の色は白。

それ以外の色は特定の職業の人だけ。

（グレーの職種ってなんだっけ？グレーなんて授業でやったかなあ？）

片葉はレフィカルの後についていきながら考えた。

レフィカル「ここで待っててね。」

レフィカルにそう言われた場所の入口の表札にはラボ4（第4研究所）と書いてあった。

（うちの学校にこんなところがあったんだ・・・。）

片葉が部屋の中を見回していると首に何かがチクツと刺さった。

片葉が痛いと思うと同時に片葉の目の前は暗くなった。

~~~~~

片葉「ううん。」

あれからどの位時間がたったのか考えることもできないぐらい、片葉は頭がぼんやりしていた。

（なんか体中が痛い・・・。）

レフィカル「おはよう。片葉ちゃん。」

片葉「レフィカルさん・・・？私・・・？」

レフィカルは何も言わずに片葉に鏡を見せた。

そこにうつたのは・・。





灰色くgray (後書き)

指を怪我してしまい、前作からだいぶ時間があいてしまいました。へへ；今回もファンタジーでいってます。楽しんでくださったら幸いです♪

黒色↳black↳(前書き)

レフィカルに見せられた鏡にうつたのは・・・。

## 黒色／black／

黒く短い髪、黒い瞳、黒い羽、鋭く尖った牙。  
成績は悪くても、唯一自慢だった容姿。

なのに今、鏡には見慣れたいつもの自分ではなく、  
暗い影を落とした少女しかうつらない。

まるで悪魔のような・・・。

これは鏡ではなく絵なのか、それとも自分の目がおかしくなったのか片葉は分からなかった。

レフィカル「混乱してるようね。無理も無いわ……。はっきり伝えておくわね？ 片葉ちゃん、あなたには今日から悪魔として生きてもらいます！！」

片葉はまだ状況が把握できずにいた。

片葉「私が・・・悪魔？」

ぼんやりと片葉がつぶやいた。

レフィカル「そうよ……。悪魔。天使と悪魔は表裏一体。ここ、養成学校で出来の悪い生徒は私の力で悪魔にするの。」

片葉「そんなこと・・・」

片葉の言わんとしてることが分かり、先にレフィカルが答えを言う。

レフィカル「できるわ。私は特別だから。」

片葉はレフィカルを見つめた。

悪魔にされてレフィカルの灰色の髪、瞳の理由が分かった。

そう、レフィカルは天使と悪魔が愛し合って出来た禁断の子。

白にも黒にもなれず養成学校の4階という狭い空間でいつも一人・・。

悪の心と、善の心を持っている彼女は人間に近いと言えるのかも知れない。

片葉はレフィカルになんて声をかけていいのか分からなくなった。

天使を必死で目指して、なのに悪魔にされてしまって腹が立つはずなのに

レフィカルの暮らしよりも悪魔になるほうがいいなんて思っていた。天使の時には無かった汚い感情がゆっくりと片葉を侵食していた。

レフィカル「・・・私がこの仕事を与えられたのはきっと、元・天使を早く悪魔らしくするためね。みんな悪魔にしたあとに私を見たら思うの、『こいつよりマシだ』ってね。天使の時には無い感情・・・『優越感』。」

レフィカルは悲しそうに片葉を見つめた。

レフィカル「あなたはいいわね。はつきり黒くなれたから。」

そう言って、部屋を出て行ってしまった。

片葉は自分の中の複雑な気持ちに戸惑っていた。  
悪魔にされたら、そのうち心も完全な悪魔になってしまうのだろうか……。

仲の良かった友達とも争ったりするようになるのだろうか……。

心細くて堪らないはずなのに、心のどこかが凍り付いているように冷めきっている。

これが悪魔の感情なんだろうか。

片葉がぼんやりと考えているとガチャッとドアが開いた。

レフィカルではなかった。

黒い男の人。この人も悪魔……。

男は片葉に冷たく言った。

?? 「ついて来い。」

言われたとおりに行くと、悪魔だらけの街についた。  
暗く冷たい空気が流れているのに、片葉は何故か心地よく感じていた。

?? 「この寮にはいってもらう。」

男は言った。

今までの寮とは違い、騒がしそうな寮。

片葉「あの……規則とかはないんですか？」

男はびっくりした目で片葉を見た。

?? 「悪魔にそんなものがあると思ってるのか?……イヤ、ある

な。『自分のしたいようにする』わかったか？」

片葉は自由な暮らしが出来ることにワクワクしてきた。

?? 「オレの名前はダーク。となりの一軒家に住んでるから、なんか会ったらいつでも来い。」

片葉「わかりました。」

片葉はダークとの出会いのおかげで悪魔もいいじゃん、と思うようになってきた。

しかし、片葉は悪魔の大変さにまだ気付いてなかった。

黒色くblackく(後書き)

これわかる人は結末わかつちやいますよねく；  
わかつて最後まで読んでくださると嬉しいです♪



## 闇色（dark）

寮の中はザワザワと騒がしくて、天使の時には常に欠かしてはいけない『秩序と冷静』なんてひと欠片も必要ないってわかった。

開いている適当な部屋に入ると片葉はベッドに横になった。

片葉の頬には黒い瞳からこぼれ落ちた涙が一筋、流れていた。

自分はもう本当に悪魔なんだって思うと、やっぱり悲しくて仕方がなかった。

静かに哀しい気持ちに浸りたいのに、そんなことお構いなしに寮は騒がしくて、片葉はなんだかやりきれない気持ちになった。

・・片葉はいつのまにか眠りについていた。

片葉は目を覚まして、しばらくぼんやりとしていた。

だけどもうしても親友の庚に会いたいと思いはじめたので、『自分は今、悪魔』なんてことを忘れて自分が通っていた養成学校へと飛び出した。

悪魔の羽はギザギザで、飛び方のバランスがいまいちつかめない。だけどもよろよろしながらも庚に会いたいという気持ちだけで、飛び続けた。

養成学校に着いた。

みんなが寮から校舎へと向かっている。  
懐かしい風景。

・昨日までは自分もその中に居たのだと思うと、胸が苦しくなつた。

庚の姿が見えた。庚はいつもとは違い、どこか元気がなかった。そう、庚は急に居なくなった片葉のことが心配で眠れずにいた。

片葉「庚くく！会いたかった!!」

片葉は庚のところに一直線に降下した。  
いつもケンカしてしまった次の日そうしていたように。

そして庚も片葉の方へ寄って来る。  
申し訳なさそうな顔をして・・・そう、いつもだったら。

だけど今はもう『いつも通り』なんて有り得ないことに片葉はまだ  
気付かなかった。

自分が悪魔だってことなんて、忘れていた。  
・イヤ、忘れようとしていた。

あと少しで庚と話せる。

片葉の胸は嬉しさでいっぱいになっていた。

しかし次の瞬間・・・

「きゃああああ！！悪魔っつ！！！！」

女の子の悲鳴があがった。

片葉が違うと否定しようとした瞬間・・・

バシーーーーン！！！！！！

片葉は何が起きたのか分かるまで時間がかかった。

腕が痛い・・・電流が流れたみたい・・・。

女生徒の叫び声を聞いて先生たちが片葉に攻撃をしたのだった。

バシーーーーー！！！！

片葉が庚の方へ少しでも近づこうと思ひ少しでも動けば、容赦なく攻撃された。

庚は私だってわかってくれるはず・・片葉はまだ信じていた。

昔の自分の容姿とはまるっきり変わってしまったてもわかってくれる、そう信じていた。

イヤ、信じたかった。

現実が辛すぎたから・・。片葉

「庚っ！！私だよ。わかるでしょ・・？わかって・・・・・。」

片葉は今にも泣きだしそうな顔をしながら、庚を見つめた。

バシーーーーー！！

先生達からの攻撃は続いていた・・。

庚

「何で私の名前を知ってるのよ！！私をたぶらかすつもりなのね？この悪魔っ！！早く悪魔の町へ帰りなさいよ！私に近寄らないで！！」

・・・・・・。

片葉の頭の中は真っ白になった。

大好きだった庚。

いつも一緒にいて、ケンカをしても次の日には一緒にいた。庚は頭がよくて片葉は頭が悪かったけど、お互いに無二の親友だと思っていた。

・・今も大好きな庚。

気が付けば片葉の瞳からは涙が溢れていた。

片葉はふらふらと空に舞い上がった。

一度だけ振り向き、庚を見つめてこう言った。  
片葉

「さよなら、庚。」

そして泣きながら、学校から遠ざかっていった。

先生達が、生徒に怪我をした人はいないか確認している中、庚は考えていた。

庚（さっきの悪魔・泣いてた。それにどこか片葉に似ていた気がする・・・）

だけど、そんなはずないわよね。）

片葉の頭は真っ白のままだった。

目に入る景色も白黒のように感じた。

片葉の心の中には、水に石を投げてできる波紋のように暗い気持ち  
が広がっていった。

**闇色 (dark) (後書き)**

遅くなってすみませんでした←←m ( m次話はなるべく早めに投稿しますので、最後までお付き合いいただけるとうれしいかぎりです ( ; ^ | ^ A

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1590a/>

---

天使の羽～アモー～

2010年10月11日13時59分発行